

物語料理クラブ

竹並 麻夕子

その貼り紙に気づいたのは、レジで清算を終えた食品品を袋につめていた時だった。カレー肉のパック、ヨーグルトとかごから取りだしていた手が思わずとまる。わたしが立っているのは、スーパーの台の前で、目の前にはガラス壁が広がっていたのだが、そこに一枚の紙がテープでとめられていたのだ。

『物語料理クラブ』

絵本や小説に出てくる、お料理を作って楽しむ会です。本の頁にしか存在しなかったメニューも、オーブンや鍋を使えば、素敵な晚餐に。皆さん、御存知のピーター・ラビットの絵本からも、特製サラダや人参クッキーが登場いたします。さあ、あなたも物語料理クラブに駆けつけましょう！」

画用紙くらいのおおきさの紙（本当に、画用紙なのかもしれない）に、小さな金釘字で、きっちりと書かれている。紙は大きいのに、文字が中央にかたまって書かれているせいで、すぐくアンバランスに見えた。

——アンバランスっていえば、何もかもが変。文章もへんてこりんだし。大体、物語料理クラブに駆けつけようって、何？

そう一笑にふして、さつさとスーパーを出るべきだった。それなのに、足に根が生え出ましたように、わたしはその場から動くことができなかった。天井の蛍光灯から、薄白い光が降りそそいでいて、店内はどこか工場のようにも見える。夜8時近い、スーパーは客もまばらで、カートがキュルキュル回る音がときおり聞こえるきりだ。ガラス戸の向こうには、水銀灯に照らされた駐車場が広がっている。

わたしは、顔をグツと近づけ、貼り紙を丁寧に読み直した。

「……クラブは、毎月第1と第3土曜日の午前十一時から一時半まで、開かれます。連絡は、電話03-4xxxx-56xx 漆原まで」

そう書かれた下には、ご丁寧に地図まで書きくわえられてあった。まっすぐに書かれるべき道筋がうねった曲線になり、信号のマークまで事細かに描かれているという、読みにくい地図だった。でも、よく見ると、環状線わきの道を左に折れた公園の隣りにあるらしいことがわかる。

「ふうん。そうだとすると、歩いて十五分ぐらいしかかからないところよね」

わたしは、つぶやくと、バッグから筆記用具を取りだして、地図と電話番号などを書き

はじめた。台の隣りにいた女の子がちらりと、こちらを見る。何なの、このおばさんというように。彼女の前のかごには、野菜、ポテトチップス、肉、ジュースといったものが子山のようにつめこまれていて、一週間はスーパーにやってこなくてもよさそうだった。

メモ帳に記入し終えて、わたしはもう一度、貼り紙を見なおした。物語料理クラブ——何だか心をくすぐるネーミングだ。ここで断っておかなくてはならないのだが、わたしは料理するなんて、大の苦手だ。できることなら、毎日三食、外食か出前ですませたいと思っている。それすらも面倒くさい時は、薬みたいに錠剤を何錠か飲んで、栄養補給できれば良いのに、なんて願うこともある。でも、まあそんなことは無理だし、外食の濃い味にも飽きるので、こうしてスーパーで買いたしをするという訳だ。

食料品の入ったビニール袋を下げ、わたしは外に出た。紺色の空が広がり、小さな月がコインのように光っている。微風が鼻先をくすぐり、夜の匂いがふわりと体を包む。水銀灯の下で、雨上がりのアスファルトはつややかに光り、前の環状線を走ってゆく車のライトが光の帯と化していた。

わたしは、スーパーを振り返った。昼見る時の、素っ気ないコンクリートの建物は、明々とした照明に照らされて、泡立つ光に包まれているみたいだった。こんなまばゆい殿堂で、人々は魚とか、トイレットペーパーとか、歯ブラシといったこまごまとした生活用品を買うのだろうか。何だか信じられなかった。

ビニール袋を握る力をきゅっとこめて、わたしは家路をめざした。貧相なアパートの、一人ぼっちの住まいへ。

市立図書館分館——ここが、わたしの勤め先だ。住宅街の奥にひっそりとたたずみ、入り口の前の植えこみには、なぜか蘇鉄と椰子がある。そのせいで、都内にあるにもかかわらず、ずっと南国の地方にあるかのような。図書館の建物は、何十年も前に建てられたもので、館内に入ると、微臭さと埃っぽさが鼻孔をくすぐる。

わたしは、毎朝館内に入ると、紺色のうわっぱりをつけ、中央のカウンターに座る。室内は静寂で、床には光の輪が落ちていく。埃が空中に舞い、音もなく本やわたしの上に降ってくる。だが、そうして静けさが破られるのは、間もなくのことだ。

「ねえ、ひしょさん。童話全集が入ったって聞いたんだけど、それはどこにあるの？」

その日も朝一番にやって来た、女性が噛みつくように聞いた。こけしのような平べったい顔に、おかつぱ。リボンが胸元についているデザインのセーターを着ているが、もう七十近いと思わせられる年配だ。週に二、三回は図書館にやってくるのだが、来る度にあれはどこにあるのとか、本の中に髪の毛や虫の死骸が挟まれていたとか文句をつける。ひしょさん、と呼ぶのも彼女だけだ。

「すみません。まだデータの手続きができていないんで、お貸しするのはもう少し後からです」

「まあ、そんなこと言って、いつもじゃないの。大体、この図書館は何もかもがのろすぎるのよ。新刊が入ったって聞いても、書棚に並ぶのは、二週間はかかるし、ぼろぼろに破れた本は平気で置いてあるし。わたしはね、いろんな図書館で本を借りてきたけど、こくくらい本の管理がなってないところは無いわね。……K市立図書館を見てみたことある？ 化学の実験室みたいにぴかぴかの部屋に、本が整然とアルファベット順に並べられているのよ。まるで、礼儀正しい子供たちみたいだね」

女性はまくしたてた。唇の端に唾がこびりつき、墓石みたいに大きい歯には、口紅さえついている。

——そんなこと言うくらいなら、K市立図書館へ行けばいいのに。

と思ったものの、もちろん口になどしない。

「ここは人手も少ないし、行き届かないところもあるだろうと思います。お探しの童话故事全集は、できるだけ早く書架に並べますから」

そう言って、頭を下げると、女性はやっとカウンターから離れてくれた。小さな舌打ちをしながら。わたしは、「ちびまるこちゃん」みたいなおかつぱが、ぷるると揺れるのを見ながら、彼女が童話作家らしいという噂話を聞いたことを思いだした。でも、髪こそ真っ黒だけれど、意地悪そうな皺が目元や口元に刻まれている彼女が、心温まる話を書くなんて、想像できない。

この図書館には、司書のわたしを含めて、二人しか職員がいない。もう一人は若い女の子で、本の貸し借りをチェックしたり、返された本を書棚に並べたりしてくれる。小さな「図書館分館」には、これで十分なのかもしれない。例の童話作家だという女性と、数人の常連の外は、日に二十人程度の来館者があるきりなのだ。

わたしは、書棚の間に立ち、本を眺めた。そこは、外国文学のコーナーで、「アメリカ」「フランス」「イギリス」と国別に記されたカードが挟まり、間に、その国々の作家の本が並んでいる。ヘミングウェイ、フォークナー、サン・テグジュペリ、マルグリット・デュラス……。こうした本の間にいると、わたしの心は落ち着いた。ずっと、昔から。時々、自分がジャムか何かのどろどろのペーストになって、本のサンドイッチの間に挟まれてみたいとさえ思ってしまう。

子供の頃から、わたしは本の世界に住んでいた。小学生の時から、図書委員をしていたし、同級生と話すよりは、司書のおばさんと話す方が多かった。「ねえ、お金持ちになったら、図書館くらい、本が買えると思う？」 わたしが聞くとおばさんは言ったものだ。「そんなことより、司書になった方がまだだよ。真ん中のカウンターにでんと座って、本たちに眼みをきかせるんだ。それで、本を借りたいという奴がいたら、えらそうに注意しなが

ら貸し付けてやれる。金持ちにはなれなくても、図書館の女王様というわけだ」

それで、わたしは司書になった。書店の真新しいつるつるした本より、少しくたびれ、読んだ人々の匂いがしみついていているような図書館の本が好きだったのだ。小さなアパートに住み、毎日規則正しく出勤する。アパートの部屋は狭かったから、自分の本はそう沢山は置けない。それで、豆本作りが密かな趣味になった。十センチたらずという小さな本に、心に残った小説の文章を綴ったり、イラストを描いたりするのは楽しかった。ある時、つきあっていた男性に、その豆本を贈ったことがある。

「こんなもの、やめてくれよ」

彼は、さも嫌そうに、顔をしかめた。

「まったく、君は本のことしか頭にないんだな」

それから、豆本は増え続け、わたしは少しずつ年を取っていった。もうすぐ、字を読むのに、老眼鏡が必要になるかもしれない。時々、自分が部屋の隅にぶら下げられたまま、人々から忘れ去られているドライフラワーのような気さえする。

「あっ」

本の背表紙をなでていたわたしの指がとまった。それは「イギリス」のコーナーで、わたしの指がなでていたのはアガサ・クリスティーの「バートラムホテルにて」だった。

「たしか、この本には素敵な料理が色々出ていたはず。謎解きとは関係ないんだけど」
独り言が聞こえたらしく、もう一人の職員の女の子が気味悪そうにこちらを見た。でも、平気だ。数人いる入館者の人たちは、本を探したり、テーブルに座って調べ物をするのに忙しいのだから。

本の表紙をなでているうちに、バターのたっぷり入ったマフィンや、オクスフォード・ママレードなど、そこに登場していたメニューが思い浮かんで、生唾がでてきた。そうだ、すごくおいしそうな料理が出てきたんだ——と思いながら、わたしはあわててうわっぱりのポケットをさぐった。そこには、「物語料理クラブ」の連絡先をメモした紙がつつまれていた。三日前、スーパーで貼り紙を見つけたきり、ぐずぐずと紙をあちこち持ち歩いてきたのだ。

よじれ、皺になった紙を広げながら、わたしは漆原という名前と、電話番号をじつと眺めた。ここでは、物語に出てくる料理を作っていくというのだ。アガサ・クリスティーのミステリ小説からだって、何か出てくるに違いない。英国の伝統的なディナー。パリッと糊のきいたランチョンマットとぴかぴかに磨いたフィークとナイフ……わたしの想像はとめどなくあふれ、戦前の英国の田園と、お屋敷まで浮かびあがった。

書棚の間から、そっとすべり出ると、わたしは奥の事務室へ入っていった。そこには電話があるはずだった。メモ帳にある番号をプッシュしている間じゅう、指が震えた。

「漆原ですが」

「あつ、あの……」

わたしは、思わず言葉につまった。それは、女性の声には違いなかったが、がらがらと
していて、いやに野太かったのだ。とても、外国の小説に出てくる料理を作ろうという、
品の良さは感じられなかった。

「一体、何の用ですか？」

「つっけんどんな声の調子は続いた。」

「黙っていられちゃ、わかんないんだけど」

「スーパーの貼り紙を見たんですけど」

わたしは一気に言った。受話器をつかむ手に、ぎゅっと力が入るのを感じる。

「そちらでやっているという『物語料理クラブ』に参加したいんです」

電話の向こうはしばし無言だった。それから、ふふふと含み笑いをする声が聞こえ、何
だか耳元で息を吹きかけられているようで、耳をおおいたくなかった。

「それは、どうも。でも、言っておくけど、これはありふれた料理教室じゃないの。うち
では、5分のできる電気レンジ料理とか、家族の健康を考えた低カロリー料理なんて作ら
ないからね。わかった？」

「はい、わかってます。物語に出てくる料理を作り、それを味わうんですね」

「そうだよ。あんた、それがわかっているんなら、言う事ない。今週の土曜日にクラブを開
催するつもりだから。——ぴっちり糊のきいたエプロンに、ふきんを持っておいで。特別
の料理を作るんだからね。汚れたエプロンなんかで、来られちゃ、雰囲気まる壊しだ。そ
れに、受講費をそえて、うちへ来るんだよ」

早口でまくしたてたかと思うと、がちゃんと一方的に電話は切れた。わたしは、のろの
ろと受話器を戻しながら、溜息をついた。本当に、この料理教室に参加することにして、
良かったんだらうか？ 図書館とアパートを往復するだけの生活をずっと続けていたのに。
何だか、とんでもないことをしてしまったような気がする。

でも、その日、アパートに帰りついたわたしが、まっさきにしたのは、壁にかけられた
カレンダーの日付に丸い印をつけることだった。二十一日土曜日、物語料理クラブ。

5
環状線わきには、長い歩道がついていて、その脇には銀行やら郵便局やら、クリーニン
グ屋などがずらりと並んでいる。わたしがいつも買い物をするスーパーもこのそばだ。わ
たしの生活圏は環状線わきに集中していて、駅から電車に乗ることだって滅多にない。私
鉄沿線の小さな駅前的一角だけを、ぐるぐるして、一生を終えるのかもしれない。都
心のデパートや行楽地に行ってみようなんて思わないし、ここで満足だ。確認したことは

ないのだが、沿線の各駅の町には、わたしと同じような中年女性がいるのかもしれない。彼女たちは、一様に人目につかない格好をし、印象に乏しい顔をしている。そうして、背中をこころもち丸め、影のように夕闇の中へ溶け込んでいくのだ。

土曜日、わたしは環状線そばの歩道を北に向かって歩いてきた。もうすぐ行けば福祉事務所があり、その横に遊歩道と一体化した公園があるはずだった。

——ちょっと寒いわ。薄いカーディガンだけでくるんじゃなかった。

わたしは、また独り言をつぶやいてしまう。十一月の終りの日差しは、柔らかく頼りない光線を投げかけていた。それでも、まだ初冬というよりは晩秋の趣で、街路樹の黄ばんだ葉はしっかりと枝についていた。

突然、灌木の茂みが現れ、その間に下へ続く二、三段の小さな石段があった。そこが、もう公園だった。石段を降りると、両側にアパートや家が並び、その間の大きな歩道の中に滑り台やブランコがあるという変わった場所だ。「この公園は、市民の皆さまのものです。きれいに、丁寧に使いましょう」と書かれたプラカードのそばに、ゴミ箱とベンチがあったが、公園には誰もいず、ひっそりと静まり返っていた。

「確か、この公園のそばって、書いてあったんだけど……」

わたしはつぶやきながら、あたりを見回した。と、アパートのそばに不思議な建物があるのが目に入った。そこだけなぜか小さな笹垣になっていて、鰻の寝床みたいに暗い通路の奥に玄関灯がぼつんとついている。そうして、門柱（珍しい、木造だった）には、「漆原」と記されていた。

「ここだわ」

息を吸い込むと、門の中へ入っていった。左右には笹林が続いていて、靴の裏に感じるのはむきだしの土だ。奥から現れた家は、古い日本家屋の平屋で、磨りガラスの戸のそばに「物語料理クラブ」とピンクの文字で書かれたダンボールの紙がかかっていた。奥ゆかしくさえ感じられる家のたたずまいと、ダンボールは妙な対照をなしている。

「ごめんください」

声をかけ、わたしは玄関戸を開いた。中は、しめっぽい匂いがして、三和土の上には、すでに数足の靴が置かれていた。

「はい、どなた？」

例のがらがら声と共に、出てきた女性を見て、思わず息を飲んでしまう。とても、かわった雰囲気の人だったのだ。大きな顔に、大きな目鼻立ち——きつくパーマがかかった髪は肩の上に垂れ下がり、眉は太くげじげじで、ひと言でいえば「ライオン丸」みたいだった。紺色のワンピースを着ていて、襟元は白いレース、胸元には見たこともないほど大きなカメオのブローチをしている。

6 「ああ、クラブに来てくれた人だね。早くあがって、あがって。皆さん、もう来てるんだ

から」

ライオン丸——漆原さんはそう言うや、もう背中を見せていた。仕方なく、わたしも後
に続く。暗い廊下を進むと、そこはもう台所らしい場所で、大きなテーブルと椅子が何脚
も並んでいた。そして、数人の人たちが、彫像のように静かに座っていたのだ。

若い女性が二人、主婦らしい女性、白髪の紳士、そして……図書館の「童話作家」まで
いた。

「あら、あなた」

童話作家は、めざとくこちらを向いた。

「ひしょさんじゃない。こんなところで会えるなんて、びっくりだわ。やっぱり、私たち
同類なのね」

冗談じゃない、と言いたかったが、童話作家が手をつかんで離さないの、やむなくそ
の前に座った。

テーブルの上には、大きなステンレスのボール、木しゃもじ、菜箸といった道具や卵、
小麦粉、林檎、ブラウンソースの缶といったものが脈絡なく並べられていた。一体、何を
作ろうというのだろうか？

「ひしょさん。美味しい料理を作りましょうよ。童話の世界だって、パンケーキや蜂蜜が
なくちゃ、成立しないんだから」

「やっぱり、童話作家でいらっしやるんですか？」

わたしは、エプロンを取りだしながら聞いた。

「ええ。底なしの井戸に飛び込んでしまったカエルや、蜂蜜の食べすぎで虫歯になったク
マの話など、書いてるわけ」

童話作家は誇らしげに、胸をはった。わたしは、深い深い井戸に落ちてしまったカエル
の気持ちを想像してみる。じめじめした井戸の底には、毒虫やら骸骨だってあるかもしれ
ない。出口は、ずっと上にしかなく、その丸く切り取られた場所に向かって叫んでも、誰
も答えてくれない。そんなシーンを思い描いただけでも、頭がくらくらした。そんな話を、
誰が読みたがるというのだろうか。

「皆さん、よくきてくださいました」

気づくと、漆原さんが目の前の椅子に座っていた。部屋の床は板張り、隅には旧式の
冷蔵庫やガスオーブンが置いてあり、その横のシンクは手術台を思わせるほど大きかった。

「さて、これから『物語料理クラブ』第一回目の講座を始めたいと思います。これから、
紙を配りますから」

そう言って、テーブルの受講生に配られた紙は、なぜか黄ばんだわら半紙だった。

7 「第一回目——『最後の晚餐』。イエス・キリストが処刑される前、十二人の弟子たちと取
った食事を忠実に、でも簡潔に再現してみたいと思います。香辛料は、古代のユダヤの地

でも使われていたであろう胡椒やナツメグを使い、肉のシチューをつくることといたします。それに、パン（生地は前もって、寝かせてあります）を焼き、ワイン、葡萄などとともに召し上がりましょう」

わたしは、もう一度、わら半紙を読み返した。書いてあることが信じられなかったのだ。でも、書かれていることはやはり同じだった。

「ちょっと、これ、どういうことですか？」

童話作家が金切り声をあげた。

「こんなの、物語に出てくる料理なんかじゃありませんよ。『最後の晩餐』だなんて……」

私たちは美術を勉強に来てるわけじゃないんだから」

「キリストは「聖書」の登場人物でもあるんですよ」

漆原さんが、平然といつてのけた。

「おまけに、「聖書」といえば、世界一有名な物語じゃありませんか」

しんとした沈黙が、あたりに舞い降りた。若い女性の一人は、眉をひそめ、長い髪をとめているパレットを落ち着かなげにいじくりまわした。主婦らしい中年の女性は、何か難しいクイズでも出されたように、紙をじっと凝視し続けている。

「ダ・ヴィンチの絵にもあるじゃないですか。弟子たちと晩餐を取っているキリストの姿が。私たちも、これらの料理をつくることで、キリストとテーブルを囲んでいる気分になれるってもんですよ」

わら半紙には、

・ブラウンソース一缶

・赤ワイン半カップ

・子ウサギの肉

・香りづけのローリエ、カルダモン

・十字架の形に切ったジャガイモ、人参

などと記されていて、それがシチューの材料らしかった。テーブルの上のトレイには、薄桃色の肉が盛りあげられている。これが、子ウサギの肉なのだろうか。

私たちは黙って立ちあがり、作業に取りかかった。野菜を切る係には、童話作家、シチューをかきまわす役は、初老の紳士、肉を切ったり、味付けをする係には若い女性たちになった。わたしと中年女性の二人は、パン生地をこねることとなった。

わたしは大きな丸型にパンをこねながら、この一風変わった料理教室のことを考えていた。何だか、とても新鮮な気持ちだ。こんな感情に襲われたことなど、ずっとなかったよな気がする。毎日毎日、図書館の椅子に座り、さなぎのように丸まって、白昼夢にふける日々だったのだ。一つの目的に向かって、一心に作業に没頭する——それはなんて素晴らしいものなのだろう。

石臼みたいなパンの形ができあがると、二人がかりで、オーブンの中に入れ、焼きあがるのを待った。

「ひどいところに来たものね」

童話作家が、こっそりわたしに耳打ちした。

「あの、漆原ってばあさん、どこかおかしいのよ」

わたしは、返事をしなかった。漆原さんと童話作家は、同じくらいの年頃に見える。それに、おかしいのは、童話作家だって、同じではないか。

やがて、オーブンから香ばしい匂いが漂ってきた。どこかビールのホップを思わせるような、香草のような独特の匂いだった。古代の草原には、こんな香りが漂っていたのかもしれない。

「ああ。あんまり、こくがでてないねえ」

見ると、漆原さんが、鍋につっこんだおたまから味見をしているらしい。

「これじゃ、キリストが食べたシチューだなんて言えないよ、味付けしなきゃ」

そういうや、冷蔵庫から何かを取りだして来た。長い楕円形をしたピンク色のもの——それを見るや、若い女性は「いやあ」と叫んで、飛びすさった。

「ほれ、このうさぎの耳を使うのさ。この耳から、こくのあるだしが出るってわけだ」

漆原さんは、うさぎの耳を二本きっちりとそろえて、シチューに放りこむと、女性をねめつけた。髪は顔の周りに逆立ち、ライオン丸というより、メデューサに近くなっている。

「情けないね。ヨーロッパじゃあ、うさぎの肉を食べることは、糞で糞沢なこととされるんだよ。食べ慣れないものを見て、きゃあきゃあ言うのは、お前さんのような貧乏人することさ」

一時間ばかりして、テーブルの上には食卓の用意が調いつつあった。漆原さんが出して来た食器は、ブルーの花模様一流ブランドのもだった。続いて出された、ワイングラスも底にドイツ製と印され、高価なものとわかる。

ぐつぐつと煮込んだシチューは、皿に盛られ、まるで高級ホテルのディナーのように美味しそうに見えたが、その間に浮き沈むジャガイモや人参の十字架が奇妙だ。

「やっぱり、気持ちわるいわ。耳が入っていたかと思うと」

若い女性が、もう一人にささやいているのが耳に入った。

「さあ。パンも焼けたようだし、切り分けていきますよ」

オーブンから、大きなパンを取り出すと、漆原さんはブレッドナイフで切り分けて行った。ふわりとした焼き立ての匂いが立ち上る。それから、赤ワインの栓も抜かれた。とりとしたマゼンタ色の液体が注がれたグラスは、窓越しの日の光を浴びてきらきら輝いていた。

9 わたしは、さきほどまでの緊張が溶けて、にわかに空腹を感じだしていた。朝御飯だった。

て、トーストを半分と紅茶しか取ってないのだ。

「みなさん」

目の前で、漆原さんがワイングラスを高々とかかっていた。

「よく言われますが、赤ワインはキリストの血です。このどろりとした暗い赤を見ると、嫌でも血を連想しますね。そう、これは真正正銘、キリストの血なのです。ゴルゴタの丘で、杭を無数に打ちつけられて、流れ出たキリストの血——ありがたく飲みましょう」

できあがった料理の前に、ほころびかけていた場の空気が、ぴしっと固くなるのがわかった。皆、かたずを飲んで、漆原さんを見守っている。

「そして、パンはキリストの体。シチューには、キリストの内臓が煮込まれているというわけ。最後の晚餐とは、キリストを料理し、食べるという聖なる行いなんです。そうすると、みなさんの体の中で、神の子キリストが生かされてるというわけですよ」

誰も、何も言わなかった。やがて、小さな溜息がもれ、それぞれがのろのろと、食事を口に運び始めた。

その日、アパートに帰りつくと、わたしはダンボール紙を切りはじめた。中に入れる紙を蛇腹折にし、聖書の文句を小さく小さく書き記す。表紙と裏表紙は、キリストの血を連想させる赤色だ。わら半紙に書かれたメニューや材料も書き、色鉛筆で絵を彩色してゆく。豆本を作っていくというのは、いつもながらわくわくするほど楽しい。

やがて、できあがった豆本は、本棚の隅にそっと重ねられる。制作NO.67 「最後の晚餐」。

それから二週間後の土曜日、わたしは再び、「物語料理クラブ」に足を運んでいた。手にさげたバッグは、キャンバス地の安物で、十二月初めの冷たい冬空には不似合いだった。だが、それしかエプロンなどを入れられるものを、わたしは持っていなかったのだ。ソールの磨りへったブーツは、歩道を歩きたびにぺたぺた音を立て、落ち葉をかさかさ踏んだ。前回の通り、石段を下り、公園に入ると、笹垣の門へ入っていく。

「こんにちは」

そう言っ、玄関の戸を開けた時、わたしははっとした。三和土の上には、靴が一足もなかったのだ。誰も、来ていないのだろうか？

「ああ。来たんだね」

待ちかまえていたように、漆原さんができた。今日も紺色のワンピースだ。たてがみのような髪はうまくカールできなかったのか、あるいは単に寝癖がついたのか、ぴんと突

っ立っていた。

「さあ、はやく上がってくれ。今日は、クリスマスの特別メニューをつくるんだからね。ぐずぐずしていると、間に合わないよ」

あわてて中に入り、廊下の奥の台所にいったものの、やはり誰もいない。テーブルの上には、この前と同じように雑多な調理道具と野菜、肉、牛乳などが積み上げられていた。わたしは、ちらりと壁にかけられた時計を見た。「十時五十八分」……間もなくクラブが始まる時間だった。だが、テーブルの周りの椅子は石のように黙りつづけ、かたとの音もしなかった。

「しょうがないねえ。もう時間だ。わたしたちだけで、はじめようじゃないか」

漆原さんはそう言うと、例のわら半紙を渡してよこした。

「第二回目——『マッチ売りの少女』。アンデルセン作の童話に出てくる少女は、貧しくマッチを売りながら、厳寒の路上に立ちつくしています。彼女があまりの寒さとひもじさに耐えかねて、擦ったマッチ……そこから現れるごちそうは、少女をいつとき幸福にします。わたしたちも、クリスマスの料理をつくることで、マッチ売りの少女を偲ぼうではありませんか」

いつもながら、訳のわからない説明文だった。それに、マッチ売りの少女の話は、大晦日のことではなかっただろうか。

(ビーフストロガノフ)

・牛肉

・サワークリーム

・玉葱

・フォン・ド・ボー

(グリーンサラダ)

・イタリアンパセリ

・グリーンリーフ

(人参のスープ)

・人参

・ビーフブイヨン

(クリスマスケーキ)

・スポンジケーキ (はじめにつくってあります)

・苺

・生クリーム

など出てきそうにない。きちんとアイロンをかけておいたエプロンを、ごそごそ着ていると、足音がして間もなく、老紳士が姿をあらわした。

結局、外には誰も姿を見せなかった。童話作家も、どこかに吸い込まれてしまったようだった。生徒がわたしたち二人だけなので、漆原さんも調理に加わり、あわただしい二時間あまりが過ぎた。

急いなので、スープのブイヨンはゆっくり煮込む間がなかったし、クリスマスケーキの生クリームのデコレーションは形が崩れ、溶けかかった氷河みたいに見えた。それでも、ごはんにはビーフストロガノフのソースをよそい、サラダやスープを添えると、クリスマスらしい華やかなものとなった。そして、テーブルの中央には、つややかな苺が顔をのぞかせている真っ白なケーキがでんと置かれているのだ。

「さあ、ここから『マッチ売りの少女』らしくしなきゃあね」

そう言うと、漆原さんは、シンクの上に置かれた何かを白い割烹着のポケットに入れると、こちらにやってきた。

「これが、『マッチ売りの少女』のクリスマスさ」

漆原さんが、ケーキの上に突き立てたのは、マッチ棒だった。細い、小さな棒がぐるりと丸く円を描き、まるでトーテムか何かのように見える。わたしは、思わず呆然として、ケーキとマッチ棒を眺めていた。シュツと音がしたかと思うと、漆原さんがライターの火をつけてゆき、白いケーキの上がぼっと燃えあがった。

だが、こうした間中、老紳士は落ち着いた、無感動な様子を崩していなかった。淡いグレーのカシミアのセーターの袖をひっぱり、黙ったまま燃えるケーキを見つめていた。やがて、マッチ棒は燃え尽き、黒い煤と灰が、クリームの上に舞い落ちる。

「さあ、これが可哀そうな少女が夢見た、ごちそうだよ。マッチが燃えている間だけ、つかの間空中に浮かびあがったというわけさ。わたしたちは、これからその幻影のディナーを取るんだ」

漆原さんは、ニヤリとして見せた。まるで、魚のアンコウが笑ったかのようなだった。冬の日差しが差す部屋の中で、わたしたちは、黙って料理を食べた。漆原さんは、ガチャガチャとやかましく、フォークやスプーンの音を立てながら。老紳士は、きちんと端正に。

アパートの部屋で、わたしは紙を切る。マッチ箱くらいに小さなサイズに切った後、表紙にはマッチ棒を貼りつける。中には、ディナーのメニューを記して、出された料理のイラストを描いてゆくのだ。そして、表紙に貼る包装紙をあれこれ選んだ挙句、そこに小さくタイトルをつける——豆本制作NO. 68「マッチ売りの少女のクリスマス」。

その次、わたしが足を運んだ時、笹垣の奥の家はぴたりと閉ざされていた。戸口の横にぶらさげられていた、ダンボールは取り外され、玄関の磨りガラスの戸にはこんな貼り紙がしてあった。

『「物語料理クラブ」は、残念ながら閉校することとなりました。また、機会があれば、開くことも夢ではないでしょう。それでは、皆さん、ごきげんよう』

磨りガラスの向こうは、目をこらしても何も見えず、笹林の緑の影が落ちていた。

それから、わたしは図書館で働いている。時々、書棚に置かれた本の中に、料理に関する箇所がでてくることがあったら、小さなハサミで、そこを切りぬくようになった。そして、素知らぬ顔で、書棚に戻すのだ。わたしの小さな犯罪は、いつか明るみになるかもしれない。でも、小さな図書館の片隅に置き忘れられた本など、気にとめる人はほとんどいない。

持ち帰った、紙片を頁の間に潜ませ、わたしは豆本を作る。そして、小さくタイトルに書き記すのだ——「物語料理クラブ」と。

(了)